※この提案がそのまま設計図になるわけではありません

歴史・景観・市民がつながる庁舎

ー蒲生にしかできないヒューマンスケールの街づくり拠点ー

【蒲生複合新庁舎】

1.各課題に対する基本的な考え方

「蒲生に根差した市民に愛される庁舎」

①歴史的な街並みへのリスペクト

石塀、石畳、生垣。武家門からわずかに覗く低い軒先。先人たちの残した趣のある蒲生の街並みは、住民たちの誇りです。新しい庁舎の計画はこの素晴らしい街並みへのリスペクトを持つことからスタートすると考えます。

②「日本一歩きたくなる街　蒲生」

誇るべき歴史的街並みを生かしたまちづくりのテーマとして、「日本一歩きたくなる街　蒲生」を提案します。観光だけでなく、街歩きや健康増進のためのウォーキングなど、日本一歩行者にやさしく、日本一歩くのが楽しいまちづくりの拠点となる庁舎を目指します。

③「歴史」と「市民」がつくる新庁舎

蒲生に相応しい庁舎は、街に対し程よい「距離感」と「スケール感」を持った、市民がふらっと立ち寄りたくなる施設だと考えます。蒲生の人々が誇りを持ち、親しみを持って利用していただける新庁舎を市民の皆様と作っていきたいと考えます。

△武家屋敷群

△蒲生の大クス

△蒲生八幡神社

△御仮屋門

2.設計を進める上で特に重視する設計上の配慮事項

「徹底した調査でエビデンスに基づいた提案を行います

①既存施設調査（PDCA調査）：既存庁舎の使われ方を調査・ヒアリングした結果の改善点を提案します。

②類似施設調査：類似施設の資料収集・視察等を行い施設の理解を深めました。（出水市野田・高尾野支所を視察）

③現地調査：建設地を視察し、地理的特徴や文化・歴史等についても調査しました。

④時代潮流調査：先進地事例や時代潮流を調査し設計に反映します。（※先進地建築研修を定期的に開催。）

△出水市野田市庁舎

△出水市高尾野支所

△先進地建築研修

3.設計チームの特徴

「利用者の声に専門チームが極め細やかに対応します」

①設計実績が豊富な専門チームの編成：庁舎、集会所、福祉施設などの設計実績豊富な管理技術者を中心に、経験豊かな専門スタッフによる体制を編成。創業以来3000を超える設計実績を持つ県内最大手の組織事務所の豊富なノウハウから幅広い提案を行います。

②相互理解を深めるツールの活用：打合せやワークショップでは、3D モデリングソフトやBIM によるCG、スケッチ、模型等を用いて視覚的に分かりやすいプレゼンテーションを行います。

③豊富なワークショップの実績：公共観光施設、民間の商業施設や金融店舗などでワークショップを開催した実績があり、市民の意見を引き出し、コーディネートするノウハウも蓄積しています。

△ワークショップイメージ

△3Dソフト・模型によるプレゼン

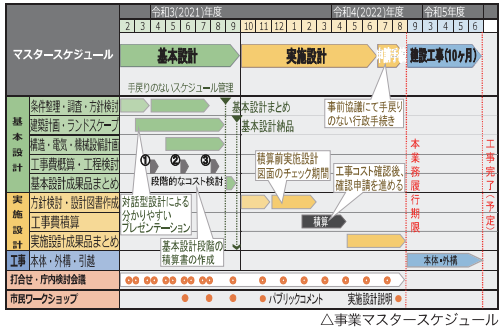
4.設計工程を含む事業全体のロードマップ

「見える化で安心できる業務を遂行します」

①コストの見える化：コスト管理士による概算算出を段階的に行い、手戻りのない設計工程を実現します。

②設計の見える化：市民も含めたワークショップを段階的に行い、計画内容を市民と共有し、意見を徴収することで市民に愛される施設づくりを実現します。

③課題の見える化：「課題一覧表」を共有することで、漏れのない確実な決定フローで合意形成を図ります。



△事業マスタースケジュール

【課題１】地域防災拠点としての施設

①避難施設として活用：避難時受け入れ施設として多目的ホール・多目的室を設定し、防災拠点機能と合わせて災害時の市民の安全性をサポートします。

②防災機能の集約：多目的ホール(大)、備蓄倉庫、蓄電・ガス設備などの防災拠点機能を2階に集約配置し、施設内で連携がとりやすい計画とします。

③本庁舎との連携：防災無線室を設けることで、本庁舎とも連携しやすい計画とします。

④防災広場：駐車場・「トオリニワ」は一体的に防災広場として利用できる計画とします。「トオリニワ」は防災広場としてのかまどベンチや、防災パーゴラを設けます。

⑤雨水の中水利用：日常的に雨水を貯留し、避難所のトイレの洗浄水を確保します。

	・災害時の避難所となることを想定し断水や停電が発生しても避難者を受け入れることが出来るよう計画する。 ・下記の設備は、災害時に外部からの供給がない場合でも、ある程度の自立性を保つ計画とする。
給水	停電時、断水時でも受水槽井水利用の水が利用できるよう加圧給水ポンプ、井戸ポンプは非常用電源を供給する。
排水	浄化槽は、電源を非常用とすることで停電時にも利用可能となるよう計画する。
電気	非常用発電機を設置し、非常時の電源供給を行う。上記インフラ設備にある程度の期間電源供給できるよう燃料を備蓄する。太陽光発電も非常用の電源として利用する。

△設備設計におけるBCP

△かまどベンチ

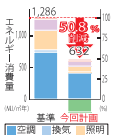
△防災パーゴラ

【課題２】環境にやさしく、経済的な施設

1.自然エネルギーを活用し、環境負荷の低減に配慮した庁舎

①ZEB ready の実現：

試算の結果、省エネのみで50.8%のエネルギー削減ができ、ZEB ready を実現します。

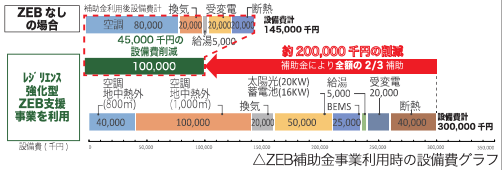


単位：MJ/㎡年

	エネルギー消費量 基準:A	エネルギー消費量 今回計画:B	BEI/BEI
外皮	470	304	0.65
空調	738	415	0.56
換気	38	14	0.38
照明	307	93	0.30
給湯	173	81	0.47
昇降機	29	29	1.00
計	1,286	632	0.49
再生可能エネルギー	0	-201	-
計	1,286	431	0.34

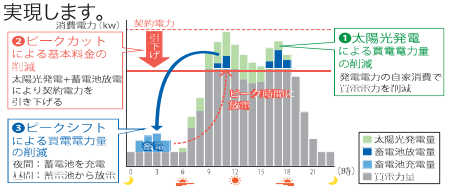
ZEB Ready の試算▷

②ZEB 支援事業を活用した補助金活用：ZEB ready を達成することで、設備機器に関わる費用の2/3 が補助金として活用できます。※鹿児島市内でZEBreadyの認証及び補助金支給物件の設計・監理実績あり。



△ZEB補助金事業利用時の設備費グラフ

③太陽光発電+ 蓄電池の活用：太陽電池と蓄電池を活用することで、「買電電力量の削減」「ピークカットによる基本料金の削減」「ピークシフトによる電力料金の削減」を実現します。



△ピークカットによる電気料金の推移グラフ

2.ライフサイクルコストの縮減を図り、経済性に考慮

①軽くて強い建物の提案：計画地は地盤強度が低いため、建物を軽量化することで基礎にかかる費用を削減し、「軽くて強い建物」を提案します。大スパンを避け、経済的なスパンのラーメン構造を採用し、コストの縮減を図ります。

②合理化と地場木材利用：鉄骨ブレース付きラーメン構造とし、2次部材を木造とすることで、建物の軽量化を図るとともに、地場産材を積極的に活用する計画とします。

※この提案がそのまま設計図になるわけではありません【蒲生】

【課題3】ユニバーサルデザインを取り入れた、人にやさしい施設

①豊富な実績に基づくUD：福祉施設等の実績が多く、バリアフリー法認定建物等などで培ったノウハウを持った設計チームがより高いレベルのUDを提案します。

②「だれでも」トイレの提案：多目的トイレと別に、LGBTの方に限らず、誰でも利用できるトイレを計画します。

③直観的にわかりやすい施設：初めて訪れる利用者も案内なしに理解できるシンプルな配置・動線計画とします。

④親しみの持てるサイン計画：案内だけのサインではなく、素材やデザインを地域特有のサインとし、地域に愛される施設を目指します。

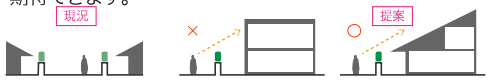
項　目	具体的な取組内容
案内・誘導	動線の最短化、段差のない計画、見通しの良い平面
サイン	触知案内、非常文字表示（地震・火災）等様々な障がい・状況に応じた計画
音声誘導	受付、エレベーター導線、トイレ等への音声誘導ガイド装置の導入
色彩計画等	明度差の確保、光らない仕上げ材料の選定、弱視・高齢者を考慮した色彩
トイレ等	障がいと行動特性を把握した計画、多目的トイレ設置
車椅子使用者用駐車場	出入口近くに設置
その他	家具・自動販売機・ATMなどの障がい者対応

△採用予定のユニバーサルデザインの一例

【課題4】市民に親しまれ、まちづくりの拠点となる施設

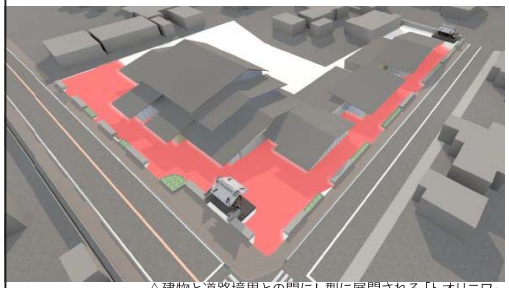
1.市民に開かれた親しみやすい庁舎

①街並みに溶け込む庁舎：由緒正しい歴史の風情が溢れる蒲生の景観に溶け込むヒューマンスケールの庁舎を提案します。軒先を低く抑えることで圧迫感を軽減する効果も期待できます。



△建物形態のケーススタディ

②トオリニワの提案：武家屋敷通りの延長として、路地空間「トオリニワ」を設け、庁舎の顔として設えます。トオリニワに沿って市民が利用する機能を有機的に配置し、街と施設が一体となった、市民に親しまれる庁舎とします。



△建物と道路境界との間にL型に展開される「トオリニワ」

③集落のようなの庁舎：おおきなボリュームの建物ではなく、小さなボリュームが集まった形状の建物を提案します。軒を連ねた集落のような形で、「トオリニワ」とともに、思わず散策したくなるような庁舎を演出します。

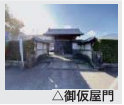
2.市民活動を支え、まちづくりの拠点となる庁舎

①まちの拠点を結ぶ庁舎：八幡馬場通りと西馬場通りの武家門をトオリニワで結ぶことで、観光資源をつなぎ、観光まちづくりの拠点として新庁舎が機能します。

△西馬場通り

△武家門

△八幡馬場通り



△御仮屋門

②食を通じたコミュニケーション：多目的室に付属するキッチンを設け、食を通じた様々な交流や、活動に対応できる施設とします。（キッチンは災害時も機能します。）

③まちとつながる施設：「トオリニワ」に開かれた多目的ホール、多目的室は街と一体となった利用可能です。

△キッチン利用のイメージ

△トオリニワを利用しておこなうマルシェ

3.市民の学習や健康促進、子育てを支援するための庁舎

①日本一歩きたくなる街づくり：街並みと一体となった豊かな歩行空間を「トオリニワ」を中心に設けることで、市民の健康増進と地域文化への尊敬の心を育てます。

②歩車道分離の徹底：建物を中心に歩行者ゾーンと車両ゾーンを明確に分け、安全でどちらからも使いやすく、駐車場による景観阻害を最小限に抑えた配置計画とします。

③路地に現れる杜の図書館：図書館をトオリニワの終着点に配置し、周辺を緑で囲むことで、自然と歴史の香りに包まれた豊かな読書空間を作り出します。

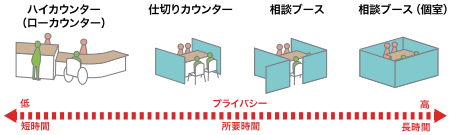
△屋外読書空間(どくしょのニワ)のイメージ

【課題5】市民サービスの向上を実現する施設

1.窓口サービスの向上による利便性の高い庁舎

①ワンストップサービスの実現：市民が多く利用する窓口を1階に集約し、利用者の動線を短縮します。また、総合窓口を設けて、ワンストップサービスで市民の利便性を向上します。

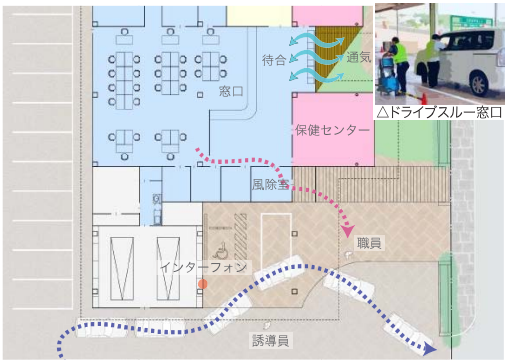
②多様できめ細やかな窓口対応：カウンターによる対応だけでなく、要望に応じた多様な対応で満足度の高いサービスを実現します。



△窓口のイメージ

③窓口機能は迅速・安全に：庁舎機能を駐車場に近接して配置し、利用者のスムーズな手続きを可能にします。また、感染症対策のドライブスルー窓口も提案します。

④ソーシャルディスタンスの確保：感染症対策として、外気に面した待合空間とします。多用途との動線分離も可能で新しい生活様式にも対応できる計画とします。



△ドライブスルー窓口

△ドライブスルー対応時の動線

2.複合機能の導入による利便性の高い庁舎

①他機能と外部・内部からつながる：共用廊下、トオリニワを介して他機能がつながり、相互に干渉しあうことで、他世代間の交流が促進されます。

②共有できるものはすべて共有：トイレや総合案内、車寄せなどの共用部を全機能で共有し、スペースと設備を最大限利用するコストパフォーマンスの高い計画とします。

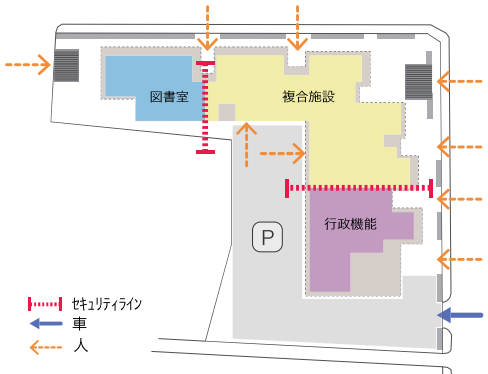
③目的なく訪れる庁舎：複合機能と併せて「トオリニワ」＝憩いの空間を設けることで、ふらっと立ち寄りたくなる庁舎とし、寄った「ついで」に他機能施設利用の機会を創出します。

【課題6】機能性・効率性の高い施設

1.効率性が高く、機能連携がとりやすい庁舎

①パラレルにもつながれる配置計画：利用者は目的の機能に直接アクセスできる配置計画とし、利便性と高めます。施設は共用部を介して連続しており、外からも中からも利用できる計画とします。

②機能に応じた管理が可能な計画：明快な管理区分で休日や夜間などの施設利用に対応可能な計画とします。



△管理区分と動線

③ICTを活用した施設連携：本庁舎・加治木生庁舎との連携（ICT：防災無線、議会中枢、Web会議）します

2.行政組織や市民ニーズの将来的な変化に柔軟に対応できる庁舎

①スケルトン&インフィル：将来的な間仕切り変更に対応するためにフレームと乾式間仕切りからなる構造形式を提案します。

②機能に対して最適な構造計画：地盤が緩い計画地で、耐震性、コスト、将来的な間取り変更などの要素を総合的に判断し、鉄骨造を提案します。

	W（木造）	S（鉄骨造）	RC（鉄筋コンクリート造）
将来的な改修のし易さ	○	○	△
Ⅰ類の強度を実現するコスト	△	○	△
建物重量（基礎コストに影響）	○	○	△
汎用性（施工者の特定）	×	○	○
工期（工期短縮）	○	○	△

△構造体比較表

3.快適な執務空間が確保され、職員にとって働きやすい庁舎

①快適な執務空間：ハイサイドライトによる柔らかな光を取り込みます。また、タスクアンビエイト照明で必要なところに必要な照度を確保します。

②職員動線に配慮した計画：公用車駐車場と執務室を隣接させ、また、執務室とタテ動線を近接させ、職員の動線を短縮します。

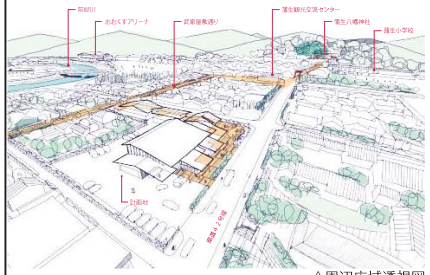
※この提案がそのまま設計図になるわけではありません【蒲生】

【特定課題】周辺の公共施設と連携（庁舎を拠点として周辺施設を安全で安心して利用できるような動線計画）

核としての庁舎

蒲生観光交流センター、くすくす館、武家屋敷通り、蒲生の大クス等が周辺に立地していることから、これらの施設と連携する新庁舎を核とする回遊エリアの形成を目指します。近隣の施設と一体となった**歩行者ネットワーク**を形成します。

△周辺広域マップ



△周辺広域透視図

【特定課題】だれもが安心して気軽に立ち寄れる憩いの場

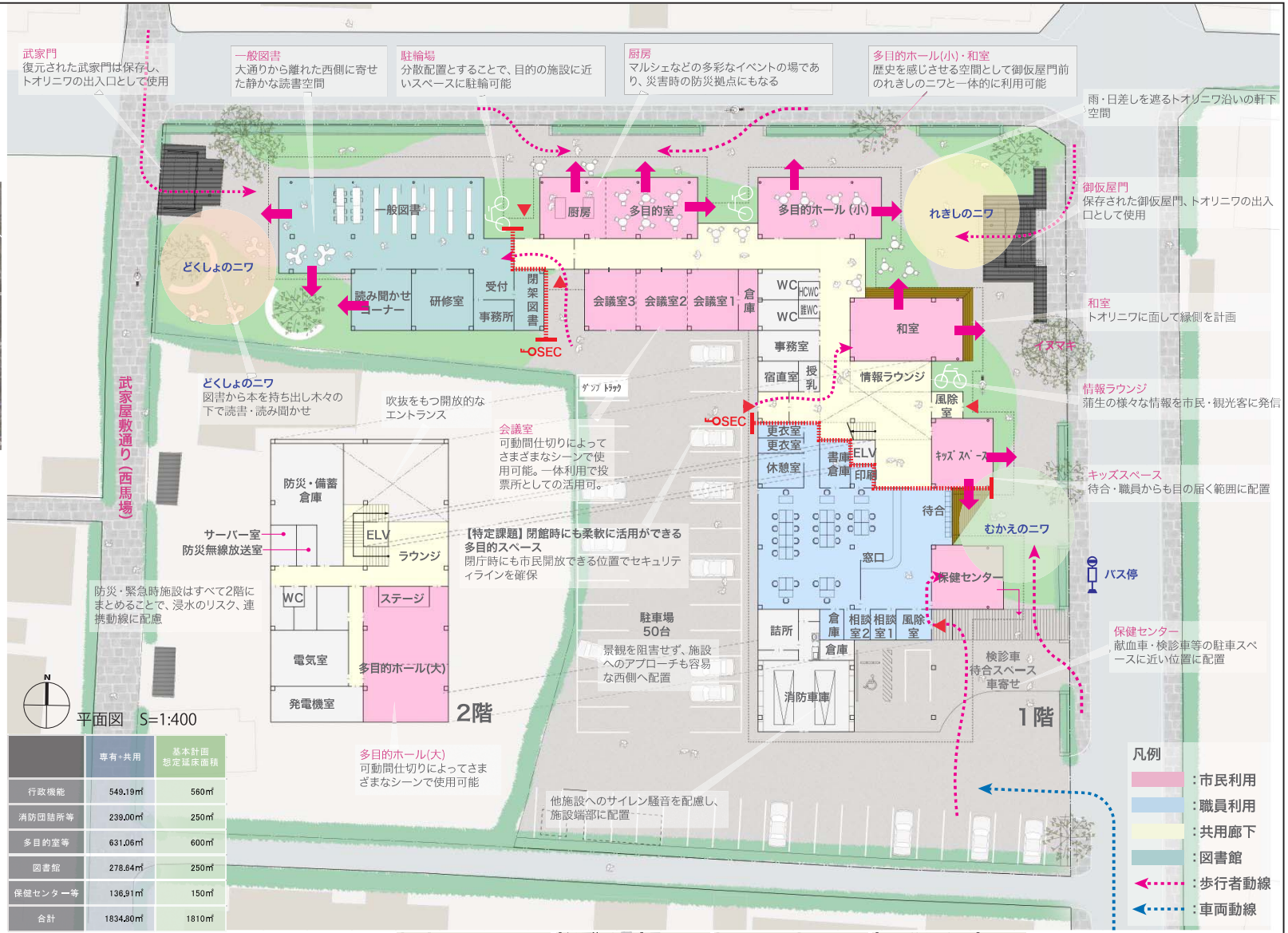
景観と人の流れをつむぐ「トオリニワ」

人々の立ち寄りのきっかけをつくる路地状の庭「トオリニワ」を提案します。本庁舎で日常的に行われる市民活動を「トオリニワ」を介して、まちに発信し、賑わいを生み出します。

3つのニワ

「トオリニワ」は性格の異なる3つの「ニワ」を接道境界に沿って繋ぎ形成します。3つのニワそれぞれを街と庁舎とをつなげるための誘導、憩いの空間とします。

△トオリニワの概略図

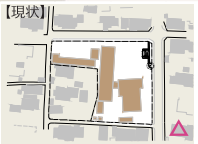


	専有+共用	基本計画想定延床面積
行政機能	549.19㎡	560㎡
消防団詰所等	239.00㎡	250㎡
多目的室等	631.06㎡	600㎡
図書館	278.84㎡	250㎡
保健センター等	136.91㎡	150㎡
合計	1834.80㎡	1810㎡

【特定課題】利便性向上及び賑わい創出に資するコンパクトな街づくりの拠点整備

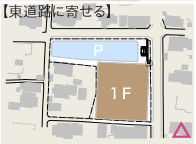
配置のケーススタディ

町とのつながりという観点でゾーニングの検討を行いました。北・東の2つの接道に対し、建物を「幅広く」、「近い」位置に配置することで、「街に開かれた庁舎」を体現し、市民活動の活性化を図ります。活動の様子を街に発信しやすくなり、また、歩行者が立ち寄りやすい配置計画となります



【現状】

建物が道路から距離がありためまちとのつながりが希薄。駐車場も分散させており、わかりにくい。

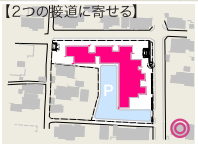


【東道路に寄せる】

御仮屋門、武家門、西馬場とつながるが、北側駐車場になるので希薄になる。

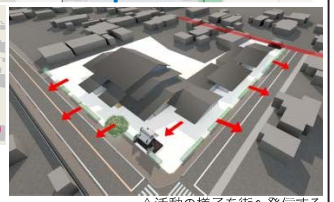
【北道路に寄せる】

東道路に大きな駐車場が来るので、ロードサイドショップのような印象を受ける。



【2つの接道に寄せる】

2つの接道辺に沿うようにL型に建物を配置することで市民の活動がみえる賑わいのある庁舎に。

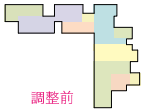


△活動の様子を街へ発信する

【特定課題】蒲生らしさをアピールできる建築デザインや地域のシンボルとなる機能

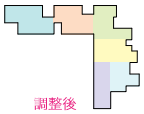
屋根の重なりの下に生まれるコミュニティ

蒲生の町にふさわしい庁舎は、おおきなボリュームのシンボリックな庁舎ではなく、集落の様に小さなボリュームが連続した庁舎だと考えます。部屋を通りに沿って有機的に組み立てることで、町並みと一体となったヒューマンスケールの庁舎を目指します。



みんなでつくる、みんなの庁舎

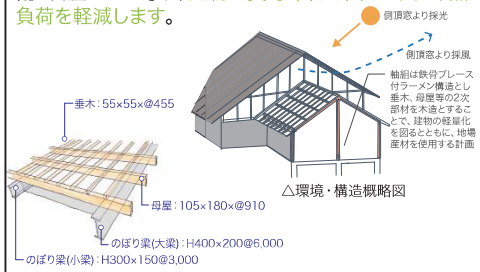
集落の様に小さな家の集まりでできたような庁舎の提案の為、部屋の配置は今後の要望等に対して容易に調整が可能です。利用者や行政と一つのチームとなり意見交換会や参加型のワークショップを開催し、様々なご要望に応えて、参ります。



気候と共生する屋根の連続

屋根の重なりがつくる隙間の空間を自然換気、自然採光として利用し、環境にやさしい建築を作ります。各室がトオリニワに向かって大きな庇を張り出し、連続する軒下空間を設けることで、強い日差しや雨から市民を守る街の縁側空間を作り出します。

軒高を低く抑え、庇を深くすることで、外壁・ガラス面を雨・日差しから守り、建物の長寿命化を図ると共に、熱負荷を軽減します。



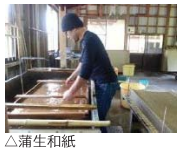
△環境・構造概略図

△構造概略図

地場産材の積極的な活用

「蒲生メアサ杉」をはじめとする地場産の素材を内装や雨がかりにならない軒裏などに積極的に活用し、温かみのある庁舎を目指します。

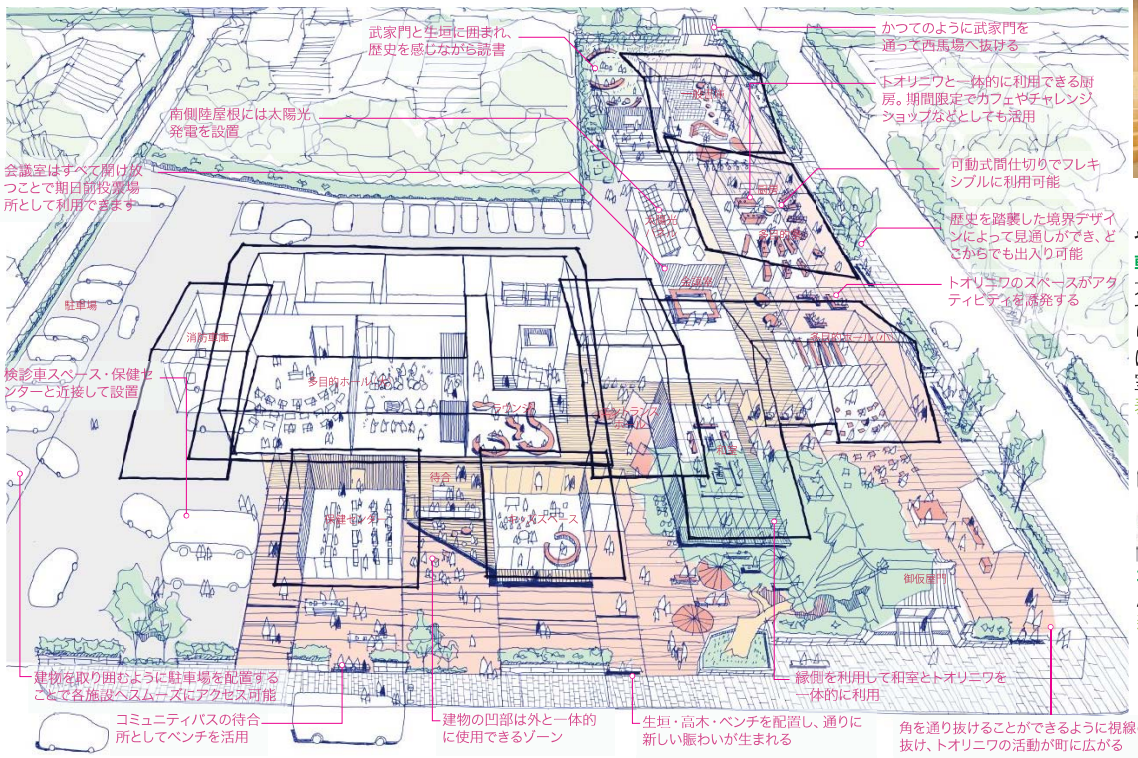
△加治木石



△蒲生和紙

△蒲生メアサ杉

△孟宗竹



歩きたくなる情報を発信

エントランスホールに情報コーナーを設けることで、蒲生の情報、観光、周辺の散策マップ等を外来者に発信し、まちの観光・回遊性に寄与する施設とします。

△内観のイメージ

【特定課題】町並みとの調和（敷地内外の歴史文化や景観を尊重し、地域の景観的魅力を育む庁舎）

軒先を低く抑えた外観デザイン

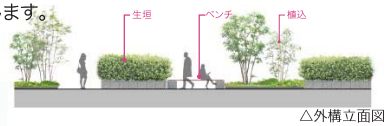
大きな規模の建築を小さな屋根で分割することで、景観に馴染むヒューマンスケールの外観を作ります。市民の活動を町に開く為、駐車場を西側に集約し、敷地の外周の道路に面して沿うよう居室を配置します。市民の活動そのものが建物の表情となる外観です。

△東立面

△北立面

境界のデザインを再構成

歴史を踏襲しつつ、開放性と賑わいを生み出す新たな境界。周辺環境とも調和した景観を形成します。



△外構立面図

武家門や、生垣から覗く軒、屋根の連なる蒲生麓のように、建物を小さな屋根で分割することで、景観に馴染むヒューマンスケールの外観を作ります。屋根が寄り添う集落のように全体を形成しています。